

日本薬局管理学会

「顔の見える薬剤師に」松木氏（東大院教授）特別講演

特定非営利活動法人 日本薬局管理

学研究会（石塚英夫会長・柳望星薬局長）

は7月6日、津田ホールにおいて第3回日本薬局管理学会年会を開催、特別講演、教育講演のほか11題の一般講演が行われた。

◆石塚会長挨拶

今までは任意団体であったが、6月10日に内閣府より特定非営利活動法人として認証を受けた。薬と健康を考える会の発展的解消に伴う事業の継承を行い、同時に一部定款の改定を経て、日本薬局管理学会はNPO法人として



石塚先生

認証を受けるに至った。

昨今の後期高齢者医療制度の問題について、個人的には国会等では「木を見て森を見ず」という議論に集中しているのではないかと感じる。世界で認められる皆保険制度を維持していくための施策の一環でありながら、本質的な議論がされてこなかった気もするが、医療従事者として制度の理解を深めることと、市民への周知・啓発を積極的にやっていくべきだ。

日本の医療保険制度は素晴らしいとはいえず、少子高齢化社会において財政基盤は無視できない課題であり、そういった状況の中、薬剤師の職能・職責をどう活かしていくかを考えなければならぬ。ジェネリック使用促進による医療費の抑制以外にも、薬剤師の職能を示すことはできる。かかりつけ薬局、おくすり手帳を通して患者一人ひとりの服薬管理をいかに行うかが直近の課題である。たくさんの方が処方されるのが一部患者のADLに影響を及ぼしている。このような場合に処方自体に対する進言もしていくべきだ。

薬物治療の効率化を目指すうえで、これまで以上に一歩進むことが必要で

はないか。インターネットの世界ではWeb2.0と言われてきている。日本の医薬分業においても成熟してきており、医薬分業2.0、調剤2.0という局面に入っている。そういったことも当研究会でテーマとして取り上げていきたい。

◆教育講演「医療コンフリクト・マネジメント導入編」和田仁孝氏・早稲田大学大学院法務研究科教授

和田氏はメデイエーションを調停と説明し「アメリカは訴訟が非常に多く、裁判以外でトラブルを解決する方法はないか」という探求が行われており、医療事故に関する病院の中での紛争解決モデルを提案したり、研修を行ったとしている。紛争解決モデルとしてのメデイエーションを応用していきたい」と述べた。英米では標準モデルとして普及しているとのこと、「メデイエーターはあくまで黒子として、中立的に紛争に介入する。紛争においては表面的な要求の裏に潜在的欲求が隠れている場合が多々あり、それを明らかにすることが重要」と述べた。

◆特別講演「これからの薬剤師が進むべき方向」松木則夫氏・東京薬科大学院薬学研究科教授

松木氏は①優れた学生や新人薬剤師を選ぶ②大学を利用し大学を支える③常に最新の専門知識・技術を保つ④科学的・論理的な思考をする⑤顔の見え

る薬剤師になるの5点をこれからの薬剤師が進むべき方向として示し、「薬のことは薬剤師にと大キャンペーンを展開し、育薬概念などを国民に啓発し、顔の見える薬剤師となろう。横並び意識は排除すべき」と提言した。巷で様々なダイエット法が流行したり、怪しげな健康食品が横行していることから「薬のことは薬剤師に」という考えが重要とした。

また、薬学の6年制教育と4年制教育の違い、東大での両者の方針、平成20年度の薬系大学における入学定員割れに関する問題などについて講演、「入学定員に対する入学者数の充足率が0.8以下となった薬系大学が、6年制においては14校、4年制では4校あった。多くの大学が卒業生の薬剤師としての力量よりも、国家試験の合格率を気にしている。薬系大学の教員には意識改革が必要である一方で、学生の意識は高い」と現況を説明した。そのうえで生き残る大学・大学教員の姿を「国家試験合格だけに満足せず、優秀な薬剤師を育て卒業後もサポートを続ける。医療現場を支える研究を通じて社会に貢献する」と例示した。

日大板橋病院

第2回臨床試験セミナーを開催

日本大学医学部附属板橋病院（澤充院長）は6月3日に、第2回臨床試